
ハル - 太陽の少年 -

† 灰音 †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハル　・　太陽の少年　・

【Nコード】

N4860T

【作者名】

十灰音十

【あらすじ】

中学三年の藤城環奈は近所に住む『サチばあ』の言葉が気がかりで森に入る。そこで見つけたのは古い『扉』。

『扉』の向こうに広がっていたのは『太陽のない』電子世界だった！

かいせー版です。

プロローグ 『春』

「バイバイ、環奈〜！」

「うんっバイバーイ！」

友達数人に手を振った。手を振るたびにあの制服が揺れる。

私はもう高校一年。

進級して三日経った。桜はまだ散り終えていない。

柔らかな風が吹くと、薄ピンクの花びらが宙に舞う。

綺麗だなあ・・・。

そんなことを思いながら、家に続く坂道を下る。

・・・あれ・・・？

道の隅に、小さなネジが落ちていた。拾ってみるとそれは蒼色のネジ。

あの世界を繋いでいたネジ達に似ている・・・。

春の日の光にかざしてみるとキラキラと輝く。

もしかして、これは本当にあのネジ・・・？

「ハル・・・」

二文字の言葉が口から漏れた。

・・・会いたいよ、みんな・・・

ネジを優しく手で包み込む。

――――
シロ

不意に誰かから、懐かしい名前で呼ばれた気がした。

私は、

プロローグ 『春』 (後書き)

かいせー版です。

でもあんまり改正した意味ないかも・・・；；

？ 夏休み『サチばあの願い』

私、藤城環奈は家にいた。

中学校生活最後の夏休みはまだ一週間も経っていない。

「暇だ・・・」

今日は久しぶりの大雨。外に出れば傘を差していようといまいと、ずぶ濡れ間違いなしだ。だから、家からは出ないし出れない……。受験勉強すればいいじゃん・・・と思うかもしれないけど、うちの中学は高校と繋がっていて進級制。何もしなくても繰り上がりで高校に入れるのだ（中学に入るのには苦労したけど・・・）。

「ふあゝ」

あくびをしてベッドに倒れこむ。その時部屋のドアを叩く音がした。

「はい？」

「あ、環奈？ お母さんだけどー」

「どーぞー」

返事をする、ドアが開いた。

「環奈・・・あゝまたこんなところに靴下脱ぎっぱなし」

「片付けるから・・・で、何？」

そう聞くと、お母さんはハッとしたように言った。

「ああそうそう。サチおばあちゃんがね、環奈の制服姿見たいんだって」

「え？ サチばあが？」

サチばあは私の家の近所に住むおばあさんで、小さい頃毎日遊びに行っていた。今でも二週間おき位に遊びに行っている。

「うん、見たいんだって」

「でも私の制服姿、サチばあたくさん見てると思うんだけど」

中学に入学した時も、学校帰りにも、サチばあの家には寄っている。サチばあ、ボケたのかな？

「違うわよ、サチおばあちゃんが見たいのは高校の制服を着た環奈」

「え、高校？」

まだ進級してないのに何で？

「うーん・・・」

ま、サチばあの事だから何か考えがあるんだろうな。

「分かった、行くよ」

「そう？じゃあサチおばあちゃんに電話しとくわね」
ドアが閉まった。

「さてとっ」

ベッドから起き上がってクローゼットを開く。そして新品の高校の制服を取り出す。

「ちよっと着づらいかも・・・」

制服は新品独特のごわつきがあった。

「よし、と」

鏡の前に立って紺色のネクタイを結んで着替え終了。中学の時の制服と違うのはネクタイの色とシャツの色位だ。

「いってきまーすっ」

・・・ああ、外は雨だった。

傘立てから傘を取り出して差した。

「冷たー・・・」

サチばあ、何もこんな日に呼ばなくても・・・。

そんなことを思いながら、サチばあの家に向かった。

？ 夏休み『昔々の話』

サチばあは私の家から歩いて五分位。赤い屋根の家がそうだ。

「サーチーばあっ」

昼間はいつも開けっ放しの玄関で大声を出す。奥でパタパタとスリッパの音がした。

「はーい、環奈かい？」

サチばあが台所からひよこつと顔を出す。

「ああ環奈だ。お入り」

二週間前に見たときと変わらない、丸眼鏡にいつもの腰エプロン。

「ちよつと待っというてね」

「はーい」

居間に入ると、畳といい香りの線香の匂いがした。小さい頃から嗅いでいる、サチばあは家の匂いだ。少し経ってからサチばあがお盆を持って戻ってきた。

「はい、環奈」

「ありがと」

運んできたのはお茶とサチばあ特製のおはぎだ。私は一口お茶を飲んだ。

「サチばあ、制服着てきたよ」

そう言っサチばあの前に立ってくると回って見せる。

「似合ってるねえ」

サチばあは嬉しそうに目を細めた。

「ねえ何で突然着て来てなんてお願いしたの？」

気になっていた事を聞いた。するとサチばあは上の方を眺めて小さく答えた。

「今のうちに見とかないとねえ・・・」

「サチ・・・ばあ？」

「サチばあは我儘、きいてくれてありがとうね」

少し喉の奥が熱くなった。

・・・死んだり・・・しないよね・・・ねえ、サチばあ・・・？
心の中でそうサチばあに問いかける。

「どうしたの環奈？」

「ん？うん、何でもない」

「そう？おはぎ、お食べ環奈」

「うん・・・っ」

小さく笑っておはぎを食べた。 なんだか、寂しい味がした。

＊ ＊ ＊

「気を付けて帰り環奈」

「うん、またねサチばあ」

サチばあはゆつくりと頷く。

もう夕方だ。サチばあの家屋根が、夕日で一層赤く見える。

「あ、環奈」

急にサチばあが思い出したように言った。坂を下ろうとしていた私は振り向く。

「この話、環奈にしたかねえ」

「どんな話・・・？」

サチばあからはたくさん話を聞いた。サチばあが小さかった時の話、今はもういないおじいちゃんとの出会いの話、それから普通のおとぎ話も・・・。

「あのねえ、これは昔々の話でね・・・」

そう言ってサチばあは話し始めた。

？ 夏休み『昔々の話』（後書き）

サチばあの知ってる昔話とは・・・？

？ 夏休み『扉』

「扉・・・？」

「そう、この近くの森には不思議な扉があるの」

「不思議な扉かあ」

少し長くなりそうだから玄関に戻って座る。

「その扉は不思議な世界に通じていてね、中に入るとたくさんの物がごちゃまぜになっているそうだよ」

「たくさんの方がごちゃまぜ？」

「ガラクタとか、色んな物だよ」

「その扉の中に入った後は、どうなるの？」

するとサチばあは悪戯っぽい笑みをみせて言った。

「入ったら・・・」

「入ったら・・・？」

「実を言うとそこをよく覚えてないんだよねえ」

「なーんだあ」

がつくりと肩を落とす。肝心の所が抜けている所がサチばあらしい。そういえばおとぎ話も桃太郎と浦島太郎が混じってたりしたっけ。

「それじゃあ遅くなるといけないからお帰り環奈」

「うん、また来るねサチばあ」

サチばあは手を振ってそれに応えた。

＊ ＊ ＊

・・・ん？

私はふと足を止めた。

森だ・・・。

サチばあの話していた話を思い出す。

『この近くの森には不思議な扉があるの』

「不思議な扉・・・だったけ」

少し好奇心が湧いた。

「ちよつとだけ行ってみようかな・・・」

森の奥に続く小道に入る。

夕方の森はなんだかいつもと違って見える。

涼しい風が首筋をくすぐった。

「ちよつと寒いな」

夏とはいえ森の中は少し肌寒い。

「・・・やっぱ戻ろうかな。」

森の真ん中で呟く。誰もいない森はちよつと怖い。

そう思った、その時だった。

「あれ・・・？」

小道の右側にもう一つ道がある。その道はここから見ても解るように途中で途切れていた。

自然と足がその道の方へ進む。

「よつと・・・」

目の前を塞いでいた木の青葉をどけて行き止まりの所まで来た。なんにもないか。

キョロキョロと周りを見回す。

「あ・・・っ?!」

思わず声を上げてしまった。

扉・・・!

そこには、茂みに隠れて古びた扉があった。

『その扉は不思議な世界に通じていてね――――』
サチばあの言葉が頭をよぎる。

「不思議な世界・・・」

私はそつと、扉の取っ手に手をかけた。

？ 夏休み『扉』（後書き）

やっと本編みたいなの……。

？ 電子世界『琥珀色の髪』

ギギギギ・・・

扉は錆びているらしく軽く引いたぐらいじゃ開きそうにない。ぐつと体重をかけて引いてみる。

ギイ・・・ガコンッ

「開いた・・・」

あれ————？

扉の後ろには何もないはずなのに、中に空間が広がってる・・・どういう事・・・？

扉の取っ手から手を放してそっと扉をくぐる。

「わ・・・っ」

ここは——どこ？

目の前に広がる世界は私の知っている世界じゃない事はすぐに解った。異常なまでに高いビル、ごちゃ混ぜになっている無数の機械やコンピューター達。足元にはネジやナット、コードみたいな物がたくさん散らばっている。

その中で一番不思議なのは私以外の人間が外にいない事だ。人間どころか生き物さえもない。

「なんで・・・」

一歩後ろにさがる。背中に扉がぶつかった。

ギイッ

「えっあっ？」

バタンッ

扉が閉じてしまった。

「ドジだなあ私って・・・」

そう呟いて扉の取っ手に手をのばした。

・・・ん？

取っ手に手が届かない。というか扉が消えかけてる。

「え、嘘っ」

消えた。

もう戻れないって事？

「嘘でしょ．．．」

こんな漫画みたいな展開って．．．。

「こんな世界でどうすれば．．．」

途方に暮れて空を見上げた。

「んん？」

青い空に白い雲、けど何か足りない様な――――？

ドゴンッッ！！！！

いきなり大きな爆発音がした。

「えっ何！？」

爆発の煙の中からおかしなロボットが飛び出してきた。歩く度に振動で地面が唸る。

「何こいつ．．．?!」

大きな爆発音がしたのに周りのビルはびくともしていない。

おかしなロボットは鉄のような物でできた球体のボディーにワイヤーの様な足が四つ付いている。大きさは私の八倍はありそうだ。

球体に付いた赤いレーザーの目がギョロリと私の方を向いた。

「．．．っ」

逃げなきゃ！

そう思ったのに足がすくんで動けない．．．！

その時だった。

「危ないよ！！伏せて！」

凜とした声がした。その声に従って伏せる。

ドンッ！

何かを発射した様な音が耳の鼓膜を震えさせた。

「っ！？」

伏せながら上を見る。

ドカンッ！！

さっきよりも大きな爆発音が響く。そしてロボットが崩れ落ちた。

「う・・・わっ」

バラバラに壊れたロボットの破片が降り注ぐ。誰かが私の手を掴んだ。

「こっち！早く！」

言われるがままに走った。次の瞬間に破片がすぐ後ろを落ちて行った。

機械でゴった返している道を手を引かれて走る。そして裏路地の様な所に出た。

「ふう、ここまで来れば大丈夫だな」

私の手を引いていた人が腰に手を当てて息を吐いた。

「あ・・・の、ありがとう・・・っ」

呼吸を整えながら言った。するとその人が振り返った。

———琥珀色の髪。

琥珀色の、肩までつきそうな髪をもっている。

「僕はハル。君は？」

弾ける様な笑顔で聞いてきた。

？ 電子世界『琥珀色の髪』（後書き）

ちよつと・・・『・・・』が多いなあ。

？ 電子世界『ハルとその仲間たち』

「え・・・と」

いきなり名前を聞かれて一瞬戸惑った。

「藤城環奈・・・です」

そう答えるとハルと名乗る少年はニツと笑った。

「フジシロカンナ・・・じゃあシロだね！」

「シロ??」

え、シロ？私の名前が？

「よろしくね、シロ」

ハルが手を差し出す。

「あ・・・ハイ」

とりあえず、シロって事だね。ハルは私の差し出した手を握ってぶんぶん振った。

「あ、そういえばシロはどこから来たの？」

「へっ？」

ええと、私は偶然この世界に繋がっていた扉を見つけて、扉が消えて戻れなくなった・・・って言えばいいのかな。

「言えない程の事情があるのかい？」

うーん、そういう訳ではないんだけど。

「そうなのか・・・じゃあ、行こう」

「え？」

ハルは勝手に解釈してしまったらしい。

「どこに行くの？」

「僕たちの砦さ」

僕たちって事はまだ仲間がいるのかな。

「そこ、気を付けて」

くねくねとした細い裏路地を歩く。どこまで行くのかな・・・。
あ、そういえば。

「あのロボットはなんだったの？」

「ん？ ああ、『クラウド』の事？」

クラウドっていうのか、あのロボット。

「あいつはいわゆる警備ロボットって奴さ」

「ハルはそのクラウドに追われてたの？」

「・・・うん」

少し間をあけてハルが答えた。

「どうして・・・？」

「それは、後で話すよ。そろそろ砦に着くからね」

ふと周りを見回す。生活感のない機械だらけの世界に、少しだけ生活感が出てきた。ここからがハルとその仲間たちの砦なんだろう。

「さあ着いた」

広い空間に出た。ハンモックが五つ機械にぶら下がっている。それからガスコンロの様な物とどこからかひいてきたのだろう、水がホースを通して流れていた。他にも私が見た事のない物がたくさんあちこちにあった。

「ここが、ハルの家？」

「僕たちに家はない。ここは僕たちの砦だよ」

真剣な眼差しでハルが言った。

「砦・・・」

自分たちを護る為の場所・・・。

「ここに住んでるのってハルだけじゃないよね」

「うん、他にはショウとズズ、ゲンとセイトって奴がいる」

ショウとズズとゲンとセイト・・・どんな人たちだろう。

「もうすぐ帰って来ると思うんだけどな・・・あ、一人帰って来た」
振り向くと、スラリとした背の高い少年が向こうから歩いて来ているのが見えた。黒いフード付のパーカーにだぼつとしたジーンズ、フードを被っているから顔はよく見えない。

その少年はスタスタと歩いて来て私とハルの前で止まった。

「・・・誰、コイツ」

落ち着いた声で尋ねる。

「こいつはシロ、新しい仲間だよ」

え、あもう仲間なんだ。

「シロです、よろしくお願いしますっ」

軽く頭を下げる。

「ふーん・・・」

シヨウは私の顔をじっと覗き込む。なんなんだ、一体。

そしてポスポスと私の頭に手を当てた。

「ヨロシク、シロ。オレはシヨウだ」

続いてやって来たのは少女だった。ショートパンツに白いタンクトップ。印象的なのは腰まで伸びている長い黒髪と鼻を中心として広がっているソバカスだ。背は私より高め。

「何・・・？この人」

若干睨むような感じで少女は言った。

「シロっていいいます、よろしくっ」

今度は自分から自己紹介した。すると少女はツンとした態度で何も言わずにハンモックの方へ行ってしまった。呆然とする私にハルは慌てて言った。

「あいつはああいう性格だから・・・、ズズってというのがあいつの事」

「おい、なんだあそいつ」

野太い声が後ろでした。びっくりして振り返る。

「シ、シロっていいいますっ」

背は私より遥かに高い。青の半袖Tシャツにダメージジーンズ。がっしりとした筋肉質な体に、鋭い眼。

「俺はゲン、よろしくな」

意外と笑った顔は優しかった。

「あー」

ゲンのすぐ後ろで声がした。迷彩柄の七分袖にオーバーオール姿。私より低い背に、ゴーグルとサングラスのハーフの様な物をかけた

少年。

「シロです、よろしくっ」

「ボクはセイト、こちらこそよろしく」

この四人がハルの仲間たち。

そして私も、今その仲間に加わったのだ。

？ 電子世界『消えた太陽と指定席（？）』

・・・仲間に加わったのはいいけど、これからどうしよう。もうそろそろ夜だ。お母さん達心配してるだろうな。

「――ーロ、シロ、・・・聞いてる？」

耳元でハルの声がして、はっと我に返った。

「あ、ゴメン。・・・何話してた？」

「俺たちが何でこんなところに住んでんのか、気になってんだろ？」
ゲンがたき火に薪をくべながら言う。

「それを今からボクが説明しようとしていたんですよ」
成程。

「じゃあ、お願いします」

私が言うのと、セイトは足を組んで話し始めた。

「まず初めに、ボクたちの世界には『太陽がない』んです」
太陽が・・・ない？

「それって・・・どういう――ー」

「まあ、とりあえず聞けてシロ」

シヨウが言った。・・・そうだね、質問は後からすればいいし。
「では続けますよ。その『太陽のない』ボクたちの世界は、一人の人物によって支配されています。その人物の名はゾイ。銀髪に赤色の目、あの顔は絶対に忘れません――ー」

ゾイ・・・その人がこの世界の支配者なのか。

「そのゾイが、この世界から太陽を奪ったんです。そのせいでこの世界はがらりと変わってしまった・・・。初めこの世界は自然あふれる緑の世界だったんです。それが今となっては機械とコンピューターに埋め尽くされた灰色の世界になり、人々は外に出ようとしなくなりました。『生きる』という事が感じられない『無』に成り下がってしまったんです――ー」

だから、あんなに高いビルが幾つも・・・。

「だけど、ボクたちはそれはおかしいって気づいたんです。『太陽のない』この世界が・・・『生きる』事を諦めてしまった人達が・・・」

「だから僕たちは、『太陽』を取り戻す為に戦う。皆が『生きる』事を忘れてしまわないうちに、『太陽』を取り戻すんだ」

そう言ってハルは手を握り締めた。
今気づいた。

この世界の空を見た時の違和感は、『太陽がない』事だったんだ・・・。

「オレとハルは昔からの付き合いで、それにズズとゲンとセイトが仲間に加わったんだ」

「それ以来ずっと一緒にここで暮らしてるって訳だ」

「へえ・・・」

そうなんだあ・・・。

話を聞きながらさっきから気になっている事がある。ズズが全然喋らない。他の四人もその事が気になるらしく、時々ズズの方を見ているのが解る。

「おいズズ、お前なんか変だぞ？全然喋んねえし」

ゲンがしびれをきらして聞いた。

「・・・別に」

短くズズが答える。

「ズズ、お前いつもの指定席シロにとられたからスネてんの？」

シヨウが面白そうに言う。

「そッそんなじゃないしっ！」

「ムキになってるじゃあないですか」

え・・・あ、そういう事かあ。

「あ、ゴメンねッどうぞどうぞっ」

ハルの隣のドラム缶から飛び退く。ハルの隣はズズの指定席だったのか、悪い事しちゃったな・・・。ズズはすっと立ち上がって、私をちらりと見てからハルの隣のドラム缶に座った。

「別に隣シロでもよかったけど、なに赤くなってるのズズ？」

・・・に、鈍い。彼女とかではないんだ・・・。

「じゃあシロこっちに座れば？」

シヨウがトントンと自分のドラム缶をたたく。

では、お言葉に甘えて。

「えーっと、どこまで話しましたっけ」

セイトがこほんと咳払いして言った。

「俺たちが仲間に加わったところだ」

「ああ、そうでしたね。————ボクたちはここを拠点として、

ゾイの基地を探しているんです。けどなかなか見つからなくて、そのうちにボクらの顔がクラウドにインプットされてしまい・・・。」

「外を出歩く奴なんてオレたちぐらしいしかないから、不審な動きをしていると襲ってくるようになったんだよ」

「あ！だからあの時ハルは追われてたんだね」

「そう、それが僕が追われていた理由」

やっと解った。

「あたし、もう寝る」

ズズが唐突に言った。

「早いですね、ズズ」

「ああ、そうだな」

「じゃあ、オレたちも寝るか」

皆よっこらしよと立ち上がる。

・・・私はどこで寝ればいいんだろう。

「あ、そうだった。ハル、シロ寝るとこない」

シヨウが気が付いて言ってくれた。

「あー・・・じゃあ————」

・・・え。

「これでいいだろ」

ゲンが言った。

「多分大丈夫でしょう」

「うん、オレもそう思う」

「じゃあおやすみ」

ちよ、ちよっとうっ

私は今、ズズのハンモックを半分貸してもらっている。・・・き、
気まずい。

「ゴ、ゴメンねズズ・・・ちゃん。狭いよね」

「・・・」

ズズは無言。寝てるのかただ単に無視しているのか微妙。

「・・・」

私も黙って、寝ようと努力。

「・・・」

そしてうとうとしてしてきた時、

「ねえ、」

・・・ん？

「あっうん、何ッ？」

いきなりズズが口を開いた。

「あんた、ハルの事どう思ってたんの？」

「えっ？」

どうって・・・今日会ったばかりなんだけど。

「い、いやどうも思ってたないよ？今日会ったばかりだし」

「そう・・・」

「う、うん」

一時の沈黙。

「・・・おやすみ、シロ」

「おっおやすみ」

ズズが眠ってしまった後も、私は一人機械の隙間から見える星空を
眺めていた。

「どんな世界の星空も、綺麗だな・・・」
そんな言葉が口から漏れた。

？ 電子世界『偽物の空』

「おい！おい？シロッ起きろよ！」

「んん？私の部屋で何で声がするの・・・あれ？」

「シロ！！」

「ん！？」

勢いよく起き上がった。

ここは――――

「うはあっ！」

ハンモックから滑り落ちて尻餅をつく。鉄板みたいな所に落ちたみたいで、かなり痛い。

「シロ、大丈夫か？」

私の顔を覗き込んでいるのは・・・

「シヨウ？」

「おはようシロ」

思い出した。

私はサチばあの家からの帰り道に、おとぎ話に出てきた扉を見つけ、ここに来たんだっけ。

で、ハルたちに出会ったんだ。

「おはよう・・・」

シヨウに手を借りて立ち上がり周りを見ると、もう皆起きていて朝食を食べていた。

「遅いぞシロ」

そう言ってゲンは朝食のパンの最後のひとかけらを口に入れた。

「ごめんなさい・・・」

「コーヒーいりますか？」

「あ、うん」

セイトからコーヒーカップを受け取る。

「はい」

「ありがとうズズ」

ズズからはパンを受け取る。多分形からしてコッペパンだろう。

「シロ、僕たちの事は大方分かっただろう？でも君の事をよく僕たちは知らない。教えてくれないか？」

「えっと・・・」

皆の視線が集中する。話しづらい・・・。

一口かじったコッペパンを飲み込む。

「私の本名は藤城環奈。桜庭中学三年で、十五歳。この世界にもともといった訳じゃなくて、サチばあっっていう近所に住んでいるおばあちゃんから聞かせてもらったおとぎ話に似た扉を見つけて——」
「違う世界から来たって事か？」

ゲンが眉をひそめる。

「うん、そういう事になるのかな。そしてその扉をくぐったらこの世界に通じていたっていう・・・。」

うーん、自分でも納得しがたい説明。私自身もまだ実感があまりないし。

「そっちの世界は？」

「え？」

「シロの世界はどんな所？」

ハルがキラキラとした瞳で聞く。まるで太陽みたいだ。

「私のいる世界は————」

そこまで言っただけで口をつぐんだ。

私のいる世界はどんな所か・・・。あまり考えた事がなかった。

「私のいる世界には皆と同じたくさん人間がいる。風もあるし空もある。それに、太陽も。あと海もあるよ」

「ウミって何？」

ズズが首をかしげる。

「海は青い水がずーっと広がっている所だよ」

「へえ・・・」

この世界は太陽を奪われて、海も存在しないのか・・・。

そう思うと、私たちは随分贅沢な暮らしをしているんだと感じた。

「オレたちの世界の空は偽物だよ」

「え・・・っ？」

昨日見たあの星空は偽物・・・。

「空はたくさんのパネルをネジで繋ぎ合わせてできているんです。空があれば太陽があるでしょう、だから空も隠したんです」

セイトがコーヒーをすすする。

「でも、そこまでしてゾイは何をしようとしているの？」

「それがさっぱり分からねえんだよ」

ゲンが大きく伸びをしよう。

「どうしてそこまでしてオレたちから太陽を奪ったのか」

「その全てをつきとめる為にも僕たちはゾイの基地を見つけ出さな
いといけない」

「そうね・・・」

皆はそう言うのと黙ってしまった。

「シロ、君はもうその世界には戻れないの？」

ハルの言葉に私は頷く。

もう・・・戻れないんだ、きっと。

「そうか・・・でももし、もし戻れたら君の世界の海を見せてね」

ハルはそう言うのと微笑んだ。

「うん・・・っ」

「さてと、飯も食ったし行くか！」

ゲンが立ち上がる。

「そうだな」

「ですね」

「うん」

「よし、行こう！」

・・・ええっと、

「あの、どこに行くの？」

すると五人は一斉に言った。

『探検だよ』

「探すんだ、ゾイの基地を」

？ 電子世界『偽物の空』（後書き）

いよいよ探し始めました。

まあ、あの五人はいつもやってるんでしょうけど。

？ 心に光を『鼓動』

「探検・・・え、探検？」

「そう、ゾイの基地を見つける為に毎日続けてるんだ」
ハルが言う。

「ゾイはなかなか尻尾を出さねえんだ」

「だから、オレたちからってな」

「出来るだけ広範囲を探ってるの」

「今日の範囲を説明しますよ」

セイトがノートの様な物を取り出す。

「何それ？」

「これは電子マップ、そんな事も知らないんですか」

む・・・。そっちの世界とこっちの世界じゃちよつと勝手が違うんだし。

「じゃあ説明しますよ」

改めてセイトが言った。そして電子マップを開く。

「ここがボクたちの砦」

そう言って赤い点が点滅している所を指さす。

「そして、この範囲が今日の目標です」

セイトがコツコツとマップを叩くと、砦からかなり離れた所が緑のベールに包まれた。

「ハルがここでシヨウがここ、ゲンがそこでズズはここ、そしてボクはこの範囲です。シロは一人だと心配ですから、ハルと行動してください」

よりによってハル・・・？ズズの視線が痛い。

「じゃあ行動開始！」

ハルがバズーカみたいなのを持ち上げる。周りを見ると皆何かしら持っている。

シヨウはハルと色違いのバズーカ、ゲンはそれよりも大きなバズー

カ、セイトとズズは腰にたくさん手榴弾をぶら下げている。

「えーっとシロには・・・」

シヨウが鉄でできた箱の中を探る。

「はい」

渡されたのは小型のミサイル入りの発射砲。さほど重くはない。

「あ、ありがと」

渡されたはいいけど、どうやって使うんだろう・・・。

「ここを引いたら、ミサイルが出るんですよ」

セイトが説明してくれた。

「心配しなくても、それは相手の動きを止める程度だから」

シヨウが昨日のように私の頭に手をぽんぽんと当てる。

「そう・・・なんだ。よかったあ」

実を言うところとちよつと怖かったんだよね。

「さ、じゃあ行こうか」

ハルが四人と私の前に手を出した。それに皆手を重ねる。私も戸惑いながら手を重ねる。

「『心に』」

「『光を』！」

それだけ言うと、皆はバラバラに道を進み始めた。多分、合言葉なんだろう。

「よし僕たちも行こうシロ」

「あっうん」

＊ ＊ ＊

どの位歩いただろう。

セイトに言われた範囲をざっと探してみたけど、それらしい場所は見当たらなかった。

ずっと曲がりくねった道が続いている。ハルは一メートル先を歩い

ている。

「大丈夫？ シロ」

ハルが心配そうに後ろを向く。

「うん、大丈夫大丈夫」

手をヒラヒラと振って応える。けど体は大丈夫じゃないと叫んでいた。けどそれは無視。足手まといになってちゃダメだもんね……。

「ホントに大丈夫？」

ハルが聞く。

「うん平気、早く行こう」

「もう少しで着くから」

「うん分かっ————」

痛……っ

「シロ！」

「いたた……」

こんな段差で足を挫くとは……。二十センチ程の段差を睨みつける。

「歩けるから大丈夫だよ」

けど、立ち上がろうとした途端に足がぐんとぐらついた。

「無茶はダメだよっと」

「うわっ?!」

いきなり目線が高くなった。

「お、重くない……?」

「大丈夫。シロは小さいし軽いからね」

おぶわれたまま下を向く。

「ありがとう、ハル」

「うん」

心臓の鼓動が高まる。聞こえてないといいけど……。
ズズの顔が頭に浮かぶ。

—————どうすればいいんだろう

「シロ、もう戻ろうか」

「うん・・・、ゴメンね私のせいで」

ハルは私の言葉に応えるようにおぶった私を少し揺すった。

＊ ＊ ＊

「ただいまー」

ハルが言った時には、もう皆砦に帰り着いていた。

「おかえり・・・ってシロ!？」

シヨウが驚いた表情をみせる。

「足挫いてるんだ」

ハルが私をドラム缶の上に下ろす。

「うーん・・・」

セイトが私の足首を見て腕を組む。

「傷の感じからしてこの薬ですね・・・」

薬箱から湿布を取り出す。そしてそれを貼ってくれた。ひんやりとした感触が足に伝わる。

「ボクの特製湿布です。きっと明日には歩けるようになってますよ」

「ありがとうセイト」

「どういたしまして」

は！忘れてた。

ズズの視線・・・・・・・・更に増して痛い。完璧にこっち睨んでるよ・・・・・・・・。

「ズズ、なんでそんな目でシロを睨んでるんだよ？怖いよ」

ハルが少しきつい口調で言う。

するとズズはきゅっと口を結んで、ハンモックに寝転んでしまった。ごめん、ズズ。

私もハルに惹かれてる。

ハルが太陽の様に暖かいから――――。

？ 心に光を『鼓動』（後書き）

当初からこの設定です＊
さてズズさんはどうするんでしょう。

？ 心に光を『まばらな光、そして影』

次の日、私は朝早くに目が覚めた。

「うーん・・・」

体が痺れているのはこのベッドのせい・・・というのは少しゲンに申し訳ないけど。昨日はさすがにズズのハンモックは借りられず、ゲンに簡単なベッドを作ってもらった。

左上にはハルとショウのハンモック、右上にはズズとゲンとセイトのハンモックがぶら下がっている。

皆はまだ寝ているらしく周りは静かだ。

「よっ・・・と」

ベッドから降りて地面に足を着いてみる。挫いた左足首に痛みは全くない。セイト特製湿布が効いてくれたみたいだ。

上を見上げると、夜明け前の空が広がっている。綺麗だけど、これはゾイがパネルを繋ぎ合わせて造った偽物の空なんだよね・・・。

「あれ、シロ？」

後ろで声がした。驚いて振り返る。

「ハル・・・」

そこにはハルが立っていた。

「どうしたの？こんなに朝早く」

「うん、なんか目が覚めちゃって」

「そっか・・・あ！シロ、ちょっと来て」

「え？」

「こっち！」

ハルに言われて砦に取り付けられた梯子を登る。

「さあ着いた、見てごらん」

私はハルに手を借りて一番上に登り着いた。

「わあ・・・っ」

思わず歓声を上げる。

「綺麗だろう？」

目の前に広がっていたのは、今まで見た中で一番美しい景色だった。立ち並ぶ高いビルとその周りに散らばる機械たち、そしてそれらに降り注ぐまばらな光……。

あれは――――

「太陽の光だ、本物の」

「本物？」

「うん、ゾイがパネルを取り付けて太陽と空を隠しただろう？ 少しでも、そのパネルがずれている所が幾つかあるんだよ」

「パネルの隙間から光が漏れてるって事？」

私の問いかけにハルは頷いた。

「あのパネルの向こう側に、太陽があるんだ……」

空を見つめるハルの瞳。私は大きく息を吸った。

「絶対に、」

「ん？」

ハルが私の目をまっすぐと見つめる。

「絶対に取り戻そうね、太陽を」

その言葉にハルは前よりも大きく頷いて言った。

「うん……！ ありがとう、シロ」

「約束するよ……ハルの瞳から希望の光が途絶えるその時まで」

「……僕も、約束するよ。絶対にシロを護る」

ハルの返答に少し言葉がつまった。

「うん……っ」

＊ ＊ ＊

―――― まだ夜明けを迎える前の事、少女は無線機のフタを開いた。

「こちらジル、応答願います」

『ああ、ジルか』

低く深い声が応える。

『計画は順調か？』

「・・・はい、ゾイ様」

無線機に長い黒髪が垂れる。

『そうか、ではまた一週間後連絡をしろ』

「はい、了解しました」

そう答え、無線機を閉じた。

周りは静かだ。

—————誰も起きてないわ。

自分にそう言い聞かせる。

大切な仲間、大切なこの時・・・。

しかしそれを想う気持ちでさえも押しつぶす程の恐れが彼女にのしかかる。

—————裏切ってはならない、裏切ればその先に待っているものは・・・死。

彼女は一人、息を吐いた。

？ **心に光を『まばらな光、そして影』**（後書き）

シロの想い、ハルの想い・・・そして――――

・・・いきなりですが、シロ（環奈）は黒髪真ん中分けのショートヘアです＊

あのシーブリーズのCMに出演てる女の子位の長さ～。

？ 心に光を『彼女の涙』

梯子から降りてくると、皆はまだ寝ていた。

「もうすぐ起きるよ」

ハルがそれぞれのハンモックを見て言う。

「そろそろ朝ご飯の準備しないとね」

そう言って金属製の棚からハルが取り出したのは・・・

「・・・ハル、それ何？」

六つの袋。それをハルは次々に開けていく。

「え、何ってインスタントスープ」

インスタントスープ・・・。

「作ったりはしないの？自分で」

すると、ハルは苦笑いして言った。

「僕ら料理だけは出来ないんだ」

「そうなの！？」

だから昨日も一昨日も同じ味のスープだったのか。それにパンも同じ。

あ、そうだ！

「私が今日のご飯作るよ！」

「えっ？」

ハルは目を丸くした。

「任せてよ、私こう見えて料理得意なんだ」

サチばあに小さい頃から料理は教えてもらってるから大体の定番は作る事が出来る。いつまでも頼ってばかりじゃダメだもんね、これ位しなくちゃ。

ハルは自分の持っているインスタントスープの袋と私を見比べてから、インスタントスープを棚に戻した。

「じゃあ頼むよシロ」

「了解っ」

さてとー・・・。

「インスタントの他に食べ物はある？」

「うん、冷蔵庫に色んな所で調達した食料が入ってるよ。あんまり使っていないけど、賞味期限は大丈夫だよ」

冷蔵庫を開けてみると結構入っていた。こっちの世界と食文化はあまり変わらない様で、私の知っている食べ物がたくさんある。とりあえず、朝は和食にしよう。

＊ ＊ ＊

「はい完成」

味噌汁に白米、それから鮎の塩焼き。川はあるらしく川魚の冷凍があった。

「美味しそう」

ハルが楽しそうに言う。

「あれ・・・ハルとシロ？」

後ろで声がした。同時に声のした方向に振り向くと、ショウがいた。

「何かいい匂いがするね」

「シロが朝ご飯作ってくれたんだ」

「へえ、凄いねシロ」

ショウがこの前の様に私の頭に手を当てて言った。その存在はまるで兄の様に感じる。

「運ぶの手伝うよ」

「ありがとう」

円を描く様に並ぶドラム缶の真ん中に置かれたテーブルに朝食を順に置いた。

「腹減ったー、飯は？」

今度はゲンが起きてきた。

「なんだか、インスタントではなさそうですね」
続いてセイトも。

「はい、皆座れー」

ショウが皆を座らせる。一つだけ空いたドラム缶、ズズの席だ。
「ズズ、起きるの遅くないか？」

早速朝食に手を付けようとしたゲンが箸を止めて言う。

「そうですね」

「いつもはオレの次に早く起きてくるんだけどな」
どうしたんだろう・・・。

「私見てくるよ」

そう言って席を立て、ズズのハンモックの方へ歩く。

「ズズ、」

ハンモックに丸まっている毛布に向かって言う。反応はない。

「・・・ズズ？」

ハンモックにのっている毛布はピクリともしない。

「ズズ、朝だよ・・・」

・・・私だから無視してるのかな・・・。

少し、鼻の奥がツンとした。そんな私の脇をハルがすり抜ける。

「おいズズ！起きろって」

ハンモックを揺する。そしてすぐその手を止めた。

「・・・重みがない」

「え？」

って事はズズはいないって事？

なんで・・・？

「ズズどこ行ったか知ってる奴いないよね」

ハルの問いかけに私たちは頷く。

「じゃあ、ズズは今どこにいるんでしょう」

セイトが首をかしげる。

「トイレにでも行ってるんじゃないか？」

ゲンが味噌汁を啜る。

「違うと思うけど」

ショウが電気の点いていないトイレのドアの小窓を親指で示す。

「とりあえず、この一帯探してみよう」

―――あたしは今、何してる？

彼女は手を止めた。

―――そう、計画を忠実に行ってる。

数十体の中のクラウドの制御装置のフタを開く。

電子パネルに文字が浮き出る。

ターゲット 入力――

彼女はカタカタと文字を打つ。

ターゲット ハル ショウ ゲン セイト――

文字を打つ手が震える。

ターゲット ハル ショウ ゲン セイト シロ――

―――大切な仲間、新しく加わった仲間。ハルは、きっとシロの事が・・・見てれば解る。そしてシロも、同じ想い。あたしもハルの事が好きだ。シロもきつとそれが解ってて遠慮してる。

・・・遠慮なんてしなくていい。もういいの、もう・・・。

シロは、もう大切な仲間の一人。なのに―――・・・

彼女の瞳からひとしずくの涙が零れ落ちる。

―――あたしは今、何してる・・・？

「どうかしたか、シロ？」

ゲンの声が横でする。私はその問いに首を振る。

――ズズ・・・。

立ち止まって空を見る。

ズズは私の事を仲間とと思ってないかも知れないけど、私はズズの事を仲間だと思ってる。

大切な仲間だって、思ってるから――

？ 心に光を『彼女の涙』（後書き）

うーん、ややこしい（？）事になってきたような・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4860t/>

ハル - 太陽の少年 -

2011年10月9日03時52分発行